



医療福祉研究科長・ソーシャルサービス専攻
井口昭久教授

専門：老年医学、糖尿病学
1970年 名古屋大学医学部卒業 医学博士
2004年 名古屋大学医学部附属病院院長
2007年 愛知淑徳大学教授
エッセイストとしても活躍。著作も多い

高度な知識と実践的技能を 併せ持つ研究者と 専門的職業人を育成。

多彩化、複雑化する社会福祉ニーズに応えるため、本学は医療福祉学部を2004年に設置。2年後に医療福祉研究科修士課程（博士課程前期）、さらに2年後の2008年に博士課程後期を置き、「人権尊重」「共生」「医療福祉環境創造」を共通理念として、ソーシャルサービスとコミュニケーション障害学の2専攻で、専門的、実践的な教育研究を行っています。これまでに修士と前期25人、後期（研究指導修了による退学）5人の修了生を送り出し、現在は前期10人、後期2人が在籍しています。

医療と福祉を融合させた 先駆的な研究科

井口研究科長 医療と福祉は、世界的に見ても歴史的に見ても、これまで全く別々に発展してきた学問です。医療は患者を治すことを前提としています。福祉は治すことが目的ではないからです。しかし日本は高齢社会となり、高齢者の病気が完全には治らないため、医療と福祉が連携して国民の生活を保障していくことが求められています。医療と福祉を一つにした本学の医療福祉研究科は、極めて先駆的な研究科だと思います。

井脇教授 全国的にも珍しい研究科ですね。
佐々木教授 回復に向けてさまざま

まなケアがありますが、メデイカルケア、リハビリテーションケア、ソーシャルケアという三領域をカバーすることを目的にこの研究科は設置されました。大変ユニークなシステムですが、アメリカにも多分ないと思いますね。

特長ある2専攻の カリキュラム

井口研究科長 まず全体のカリキュラムの特長として挙げられることは。

佐々木教授 先ほど井口先生がおっしゃったような医療と福祉の統合を図るような、理念を追い求めたカリキュラムになっていると思います。

井脇教授 本研究科のカリキュラムの特色は、医療福祉の基本的理念や関連領域の学際分野、研究方法などを学ぶ「医療福祉環境創造科目」を設置していることです。

井口研究科長 それでは、ソーシャルサービス専攻のカリキュラムの特長は何でしょうか。

佐々木教授 福祉の分野では現在、エビデンス（臨床結果などの科学的根拠）を基礎にしたソーシャルサービスを確立することが求められています。統計、分析が重要になりますが、本専攻ではその流れに基づいて、ソーシャルワークの支援の方法論、政策論などを展開しているカリキュラムを組んでいます。

井口研究科長 コミュニケーション障害学専攻の特長は。





左：コミュニケーション障害学専攻言語聴覚学コース
前期課程2年 大野智恵さん
右：コミュニケーション障害学専攻視覚科学コース
前期課程2年 本田陽祐さん



左：ソーシャルサービス専攻 前期課程2年
岩山絵理さん
右：ソーシャルサービス専攻 前期課程2年
細井正子さん



コミュニケーション障害学専攻
言語聴覚学コース
井脇貴子教授

専門：言語聴覚障害学
2001年 大阪教育大学大学院修士課程修了
教育学修士
2004年 愛知淑徳大学助教授



ソーシャルサービス専攻
佐々木政人教授

専門：社会福祉学、児童・家族福祉学
1989年 コロンビア大学スクール・オブ・
ソーシャルワーク博士課程修了
社会福祉学博士
2005年 愛知淑徳大学教授

医療福祉研究科博士課程（前期・後期）

ソーシャルサービス専攻

多様化する福祉ニーズに応えるため、より広い視野から広範囲な支援サービス（ソーシャルサービス）について専門知識を究めた、地域社会に貢献できる高度な専門的職業人を育成します。

コミュニケーション障害学専攻 言語聴覚学コース

言語聴覚士の有資格者や言語聴覚学に関する研究を行う学生を対象に、最新知識の修得、臨床研究能力の訓練を通じて、高い専門性を備えた人材を養成します。

コミュニケーション障害学専攻 視覚科学コース

視能訓練士の有資格者、視覚科学や視能訓練学に関する研究を行う学生を対象に、最新知識の修得、臨床研究能力の訓練を通じ、より高度な専門家を養成します。

井脇教授 本専攻では3タイプの入学生を想定してカリキュラムを設定しています。二つめのタイプは、本学学部卒業生がさらに研究を深め高度な専門家をめざす場合、二つめはキャリアアップやスキルアップをめざす現場で活躍する言語聴覚士や視能訓練士のリカレント教育、三つめは無資格者でコミュニケーション障害の教育者や研究者をめざす場合です。そのため専門的講義科目の他にも、統計や研究法そして英語の文献講読のための実践的演習科目が精選されています。

臨床、基礎と、バランスの取れた教育スタッフ陣

井口研究科長 教員スタッフの特長は。

佐々木教授 井口先生のように臨床経験を積まれてきた先生を始め、現在も福祉の臨床現場で活躍している先生、地域の福祉関係部門との太いネットワークを持ち、地域プロジェクトに関わっている先生が多くいます。

また、私はアメリカですが、春見静子先生はスイス、伊藤春樹先生はイタリアで福祉・医学を勉強され、国際的な感覚を持ったスタッフがいることも特長です。春見先生は今年7月に開催されたアジア・太平洋ソーシャルワーク会議という4年に一度開かれる国際会議のコーディネーターを務められており、アジアの福祉の状況も分かります。海外の福祉に関心のある方は、是非学んでほしいですね。

井脇教授 コミュニケーション障害学専攻は、言語聴覚学コースと視覚科学コースに分かれており、言語では耳鼻科医2人、小児科医1人、言語聴覚士5人、言語学者1人。視覚では眼科医1人、視能訓練士3人、実験心理学者3人と、臨床研究と基礎研究の教員をバランスよく擁しております。

井口研究科長 臨床もしながら、大学院で教えているんですね。

井脇教授 有資格教員のほとんどは、現在も医療機関で臨床を続けています。常に臨床の経験を持つていないと教えるときに内容が空虚になるような不安感を覚えます。技量を磨くためにも、臨床は継続していきたいと思っています。

井口研究科長 愛知淑徳大学クリニックとの連携は。

井脇教授 クリニックには言語聴覚士が5人おり、教員も自分の専門領域の患者さんには対応しております。学部卒業後、研究科に進む学生は、国家資格免許を持ちながらも研究に専念するため、臨床経験にブランクができることを心配します。その点をご配慮いただき、今年度からクリニックで時間雇用で臨床経験を積んでいます。今後はさらに、クリニックが本研究科の学生の研究のフィールドにしていただけるよう連携を深めたいと思っています。

井口研究科長 本研究科は設備面ではかなり整っています。全国でも有数だと思っています。

井脇教授 視覚も聴覚も、臨床の場としても研究の場としても設備は充実していますね。

佐々木教授 福祉は設備面ではあまりお金はかからないのですが（笑）、それでもコンピュータやコピー機の利用など、院生には具体的な配慮を図っています。

ソーシャルサービス専攻 前期課程2年 岩山絵理さん

藤女子大学人間生活学部人間生活学科卒業。知的障害者入所更正施設に3年間勤務。青年海外協力隊養護隊員の養護学校教師としてウガンダで2年間活動。現在は小規模多機能型デイサービスの生活相談員として勤務。社会福祉士、ホームヘルパー2級。

●研究テーマ「地域における障害者施設の在り方～利用者の処遇と施設経営から」。指導教員は伊藤春樹教授。



左より、ソーシャルサービス専攻 佐々木政人教授
ソーシャルサービス専攻 井口昭久教授
コミュニケーション障害学専攻 井脇貴子教授

ソーシャルサービス専攻 前期課程2年 細井正子さん

愛知淑徳大学文学部コミュニケーション学科卒業。豊田市で介護保険事業の通所介護を2か所で経営。保育士、介護福祉士、介護支援専門員（ケアマネジャー）。

●研究テーマ「規模別からみた通所介護の質の検討～豊田市を例として」。現在は高齢者を対象にした仕事をしていますが、今後、対象を広げていければと思っています。指導教員は春見静子教授。



何か一つのことを成し遂げた時の達成感、充実感をこの研究科では是非、経験してもらいたい。——井口研究科長

論文を書いて終わりではなく、常に実践力を磨いてほしい。——佐々木教授

スペシャリストとして現場のリーダーに。——井脇教授

院生は社会人が多いが、学部出身者も

井口研究科長 院生の傾向としては

佐々木教授 ソーシャルサービス専攻は社会人の方がほとんどですね。修了生14人のうち学部卒業生は2人だけです。福祉の現場にいる方だけでなく、看護学の教員をされながら修士を目指している方などいろいろで、リカレントで研究をまとめて、その成果を地域社会に返していくということが多くですね。こちらの2人も社会人です。

細井さん 愛知淑徳大学へも社会人で入りました。当時はケアマネジャーをしていましたが、仕事ばかりだと柔軟性がなくなってくるため、仕事とは違った視点を持ちたいと思い進学しました。2003年3月の卒業と同時に、高齢者の通所介護を始めました。そして2年前、再び研究手法を学びたいと思い、仕事に関わるテーマを発展して研究するにはこの研究科が一番適していると

思つて、入学しました。

岩山さん 私は北海道の障害者施設で働いたあと、アフリカで2年間、障害児ケアのボランティアをしたのですが、それまで学んできたことが全く役に立ちませんでした。そこで次のステップに進むためにも、もう一度勉強しようと思い、大学の時に世話になった伊藤春樹先生に相談したところ、愛知淑徳大学に移られていることを知り、北海道からこちらへ渡ってきました。

井脇教授 コミュニケーション障害学専攻の修了生及び在籍生は言語が10人、視覚が4人です。学部卒業生、卒業後現場を経験してから大学院に入った学生、リカレントの学生などがおり、そのほとんどが有資格者ですが、特に資格がなくても、こちらの分野に興味があれば学んでいただけます。

大野さん 卒論の続きをもっと研究したいと思った時、やはり環境が整っていることが魅力で本研究科を選びました。言語聴覚士は聴覚、成人、小児などの各領域で仕事をしま

経験豊富な教授陣、充実した実験設備が魅力

すが、大学院で自分に向く領域を見つけたと思ったのも理由です。

本田さん 専門学校で4年間、目や光学についてトータルに学びましたが、さらに高い専門性を培いたいと思い、こちらを選びました。基礎研究を行うために必要な実験計画や実験手法を学べることにメリットを感じました。

井口研究科長 本学研究科に進学してよかったと思うことを教えてください。

細井さん 医療福祉の各分野で活躍されている先生方のお話を身近に聞けることです。疑問に思ったことは、その場ですぐに聞けるのもいいですね。

岩山さん 福祉に関して総合的に学ぶことができる点と共に、少人数制の授業で知識、経験が豊かな先生方のお話を聞けることです。また参加型の授業が多く、さまざまな経験を

医療福祉研究科

コミュニケーション障害学専攻言語聴覚学コース
前期課程2年

大野智恵さん

愛知淑徳大学医療福祉学部医療貢献学科言語聴覚学専攻卒業。言語聴覚士。

●研究テーマ「聴覚情報処理の困難さを自覚するものに対する生理学的な検討」。聴覚情報処理が困難なものに対し、P300を用いたオドボール課題で生理学的な検討を行います。将来は言語聴覚士と教員免許のダブルライセンスで、難聴児教育に関わりたいと思っています。指導教員は井脇貴子教授。



コミュニケーション障害学専攻視覚科学コース
前期課程2年

本田陽祐さん

キクチ眼鏡専門学校眼鏡光学科（4年制）卒業後、同校の研究員として1年間勤務。日本眼鏡技術者協会認定SSS級認定眼鏡士。

●研究テーマ「経線不等像視の基礎研究」。網膜像の左右差を調べる検査表をさまざまな角度に提示した場合、被験者が知覚する不等像視にどんな変化が起こるかを検証しています。指導教員は高橋啓介教授。



してきた院生の話はとても刺激になります。

大野さん 所属の先生はもちろん、集中講義などで臨床や研究の経験が豊富な先生方から話を聞けることです。同じ専攻の視覚科学コースの授業を受けることができるのもいいですね。また、聴覚情報処理について研究しており、その一環として脳波を取っていますが、それに必要な機器類や、その施行に必要な知識を得ることが出来ます。

本田さん 実験設備がとても充実しています。視覚関連の実験をしようとして「機械がないからできない」と言われたことは一度もありません。それと高い専門性が養えたことです。特に視覚心理学の分野である色の知覚や明るさの知覚など、人間の「見え」のメカニズムについて演習を通して理解できたことは、自分にとって大きな収穫でした。

井口研究科長 院生の修了後の進路は。

佐々木教授 ソーシャルサービス専攻では、現場を持たれている方や教員の方は、それぞれ現場や学校へ戻られます。学部から入った院生では、大学の教員になった人もいます。

井脇教授 コミュニケーション障害学専攻では、リカレントの学生は所属する現場に戻ります。学部からの院生は、本学のキャリアセンターを利用して就職しますが、求人数はかなり多いですね。今のところは皆さん、

資格を生かして就職しています。

研究科の今後の使命は 次世代の研究者の養成

井口研究科長 本研究科で学ぶ院生に何を得てもらいたいと思いますか。

佐々木教授 論文を書いて終わりではなく、常に実践力を磨いてほしいと願っています。修了後は社会福祉分野の企画を立てたり開発をすることがあると思いますが、そのためには社会が必要とするサービスをデザインする創造力を持つと同時に、ソーシャルサービスのマーケティング力を高めてほしいですね。特に細井さんはすでに二つも介護施設を運営されているので、その意味でもソーシャルマーケティング力を身に付けていただきたいと思います。

また、これは課題となるのですが、本研究科には社会福祉臨床実習（ポリシイプラクティス…政策臨床を含む）のようなものがないので、今後そういうカリキュラムを取り入れて、臨床実践力を高めてほしいという希望を持っています。

井脇教授 前期課程では、学部卒の学生は最新知識の習得と臨床研究能力の向上を目指し、修了後は医療現場でセラピーの介入がどう患者さんに生かされたのか検証する能力を身に付けてほしいと思います。今後、保険制度が厳しくなる

と、治療の効果を明らかにすることが、自身の職種を守ることもつながるからです。リカレントの学生はさらに専門性を向上させ地域社会に貢献できる、より高度な専門家として活躍してほしいと思っています。後期課程では、国内外で通用するような研究を行うと共に、スペシャリストとして、現場でのリーダーになってほしいですね。

井口研究科長 先ほど細井さんも言われましたが、同じ職場で仕事をしていると伸びきったゴムのようになってしまう。そこで大学院で学ぶことで弾力性を付けて、また働くためのエネルギーを蓄える場にしてほしいと願っています。

そしてせっかく勉強するのですから、何か一つのことを成し遂げた時の達成感、充実感をこの研究科では非、経験してもらいたいですね。立派な論文や成果にならなくてもいいので、自分でしかなし得ないことを在学中にやっていたきたい。自分が努力して何かを発見した時の喜びというのは何ものにも代え難いもので、その喜びは一生の糧になるはずです。

医療福祉研究科は新しい研究科として今後、次世代の研究者を育成すること、本当の意味での研究者を養成することが求められていると思います。皆さんにも腹を据えてもらって、立派な研究者になってほしいですね（笑）。